

砦と山城 (埋蔵文化財センターの発掘調査成果から)

戦国時代の終わりころ、甲斐の武田方と武蔵・相模の諸将たちとの勢力争いが行われた国境地帯は、きわめて不安定な政情であったことが想像されます。

このように東方からの緊張関係にさらされ、軍事・防衛上の要衝であったこの地域で大きな役割をはたしたのは眺望のきく山頂や尾根に点在する山城群のろ、火台群で、長峰砦ながみねとりで、大倉砦おおくらとりで、小伏の城山こぶし、猪丸の城山いまる（以上鶴川・仲間川筋）、鶴島御前山つるしまごぜんやま、枋穴御前山とちあなごぜんやま、牧野砦まきのとりで、四方津御前山しおつごぜんやま、綱之上御前山つなのうえごぜんやま、斧窪御前山おのくぼごぜんやま（以上相模川筋）などがその所在を知られています。



長峰砦出土の鉄砲玉

平成7年～平成10年にかけて中央自動車道拡幅工事に先立って行われた長峰砦跡くるわ（市指定史跡）の発掘調査では、尾根を整形して造られた郭跡、尾根を切断する堀（堀切）跡などが確認されています。この長峰の地は眺望に優れ、尾根伝いに東方から侵入する勢力に備えるとともに、大倉砦と連携をとりながら仲間川筋の情勢をつかみ、その情報を四方津御前山など後方の城砦に伝える役割に最も適した場所と考えられます。

また堀跡から見つかった鉄砲玉の成分分析の結果、鉄砲玉は通常は鉛で作ることが一般的なのに対し、青銅製であることわかりました。鉄砲玉の材料とするため質の悪い銅銭を集めることを命じた文書（武田氏の朱印状）が知られていることと合わせると、小さな遺物から戦国社会の一端が浮かんでくるようです。

これらの城砦の多くは詳細が明らかではありませんが、これまでの研究で、相互に有機的な繋がりを保ちながら、国境警護や通信機能の役割の一翼を担っていたと考えられています。



⑱長峰砦跡 発掘調査時の様子(手前が東京方面、奥が甲府方面)